

## ● 優秀賞

## 追究意欲を高める 社会科教材の開発と 学習活動の工夫

熊本県玉名市立有明中学校  
(前・熊本大学教育学部附属小学校)

いのうえゆういち  
井上裕一



### 〈概要〉

本研究は、昨年度前任校（熊本大学教育学部附属小学校）で取り組んだ第5学年「水産業」における授業実践についてまとめたものである。

本実践では、熊本県天草市天草町大江で、水産物のブランド化に取り組んでいる事例を取り上げ、ブランド化の背景やその効果に焦点を当てて授業を行う。ここでは、たくさん獲るためにどのような工夫をしているのかではなく、なぜ、一匹一匹を丁寧に獲って魚を大切に扱っているのかを追究させる。水産物のブランド化は、限られた水産資源の有効活用方法であり、魚価の底上げや地域漁業の活性化につながるものとして着目されている。つまり、漁獲量に頼らず、少ない魚を手作業によって品質管理し商品化することが、厳しい漁業を取り巻く課題を解決するための工夫といえる。

そうした地域の事例の教材化を図り、輸入魚の増加による魚価の低下や乱獲等による水揚高の減少という課題に対し、魚のブランド化により獲る漁業から獲って販売する漁業へ転換していく姿に着目させ、日本の漁業の在り方についてとらえさせていく。

### I はじめに

中央教育審議会の答申において、小学校社会科に関する改善の具体事項の内容を見てみると、これまでと同様、作業的・体験的な学習や問題解決的な学習の重要性が指摘されている。だが、それらに加えて、次のような新しい学習の提案もなされている。

「各種の資料から必要な情報を読み取ったりしたことを、的確に記録し、比較・関連付け・総合しながら再構成する学習や、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことにより、お互いの考えを深めていく学習の充実を図る」ことが述べられている。

つまり、作業的・体験的な学習や問題解決的な学習の継続だけを求めているのではない。「再構成する学習」や「お互いの考えを深める学習」も重要な学習として提案されている。再構成する学習とは、学習問題の再構成、解釈や考え方の再構成などを指し、お互いの考えを深める学習とは、協働思考を伴う問題解決ととらえることができる。

このようなことから、多様な学習活動を、組み合わせ、関連付けたりして、社会科授業をより充実させていくことが求められていると考えられる。

そこで、本研究では、そうした新しい学習指導要領の趣旨をふまえ、「追究意欲を高める社

会科教材の開発と学習活動の工夫」というテーマのもと、第5学年「水産業」における授業実践について述べる。

## II 研究の視点

### 1 問題意識を高める教材の開発〔視点1〕

先述したように、社会科では、作業的・体験的な学習や協働思考を伴う学習等、多様な学習活動を関連させながら位置付けることが求められている。しかし、子どもたちの問題意識のないところでは、活動だけが先行し、子どもたちの思考を深めていく学習を展開することは難しく、また主体的な追究への意欲も高まっていない。

そこで、子どもたちが「なぜだろう」「納得できない」といった問題意識を高めることが何よりも必要である。そのために、既有的知識や生活経験だけではうまく説明することが難しい事象を取り上げ、追究意欲を高めていくことができる教材を開発する。そのような事象に出合った子どもたちは、問題解決に向けて個々の方法で調べたり、自分の言葉で伝え合ったりしながら、学習を進めていくことができると考える。

### 2 子ども相互の交流を促す学習活動の工夫〔視点2〕

学習課題に対し、子どもたちそれぞれが主体的に追究するだけでは、考えが一面的であったり、客観的に自らの学習活動を振り返ったりすることができず、学習が浅いものになってしまう。そこで、自分の考えを広めたり修正したりしながら、学習課題についてより深く追究していくことができるようにするために、子ども同士の交流を促す学習活動を工夫していく必要がある。そうした工夫について、次の3つの点から考える。

#### (1) 調べ活動における体験や資料提示の工夫

子どもたち一人一人が考えのよさを発揮しながら追究していくためには、それぞれの関心や目的に応じた調査活動ができるような環境づくりを工夫する必要がある。

見学を単元の中で効果的に位置付け、体験的な活動を充実させる。また、子どもたち自身が、複数の資料を読む中で自ら必要な物を探したり、何度も資料を確認し考えを修正したりすることができるよう、資料提示の仕方を工夫する。

そして、それぞれが見たことや読み取った事実を自分の考えのよりどころとしてシートにまとめさせる。そうすることで、具体的な根拠をもとにした話し合いになり、主体的に課題を追究していくことができると考える。

#### (2) 自分の考えをまとめたシートの活用

互いが主体的に話し合いに参加できるようにするためには、自分なりの考えやその根拠をもたせておく必要がある。そこで、自分の考えとその根拠を明確にしたシートを用意し、意見を交流する中で友達との共通点や相違点を明らかにすることができるようにする。そして、子どもたちが、調べたことを持ち寄ってかかわり合えるように、グループや全体で話し合う場を設定する。

こうしたシートは、事前に教師が子どもたちの追究の視点やこだわりを把握する上でも有効である。事前に話し合いをする際にかかわらせたい考えを教師が見取り、グループや全体で取り上げることができる。

#### (3) 個や集団の思考を深めるための教師のかかわり

話し合いにおいて、自分の考えや全体の考えを深めていくことができるよう、教師が、発言やシートから個々の考えや根拠を見取り、発言をつなげるようにする。その際、子ども対教師のやりとりに終始せず、発言する子どもの考えと自分の考えとの相違点や共通点に着目させ、考えを述べさせていくようにする。

また、事前のシート等をもとに見取った考えや根拠を取り上げたり出合わせたりしながら子ども同士の交流を促し、話し合いで新たな考えや説明を導き出していく。

そのようにして、子どもたちの発言を教師が取り上げ、整理していく中で、個や集団の思考を深

めていく。

### Ⅲ 学習の指導計画

1 単元名 第5学年「獲る漁業から獲って販売する漁業へ～『あまくさあじ』の挑戦～」

#### 2 単元について

本単元では、輸入魚の増加による魚価の低下や乱獲等による水揚げ高の減少という漁業の課題に対し、効率的に獲るのではなく、品質を高めて販売するという魚のブランド化の事例を通し、日本の漁業の在り方について考えさせていく。

そこで、熊本県の天草町でブランド化されている「あまくさあじ」を教材化して取り上げる。あまくさあじは、ブランド魚として、漁師の生活向上と漁村の活性化を切実に願う漁師たちにより立ち上げられている。たくさん獲るための工夫を追究するのではなく、一匹一匹を丁寧に獲って魚を大切に扱っている理由を追究させることで、輸入魚の増加、国内生産量の低下、後継者の不足といった現状が見えてくる。また生産者側の立場に立たせることで、魚のブランド化の効果を、魚価の底上げ、魚の高品質化、地域産のPRといった視点で考えることができる。さらには、教材の対象が県内のため、魚の商品化工程の見学や聞き取り等、学習活動の幅を広げることが

できるし、消費者の立場から漁業をとらえることも可能である。したがって、「あまくさあじ」の教材化は、今後の日本の漁業の在り方についての考察や学習活動の充実を図る上で、非常に有効だといえる。

#### 3 指導計画

本研究で述べる単元の構成を下の資料1に示した。

### Ⅳ 指導の実際

#### 1 問題意識を高める教材の開発〔視点1〕

本実践では、東シナ海に面する天草町でブランド化された一本釣りの「あまくさあじ」を取り上げた(資料2)。



●資料2／ブランド名の入ったラベル

学習活動	教師の指導・支援	時間
1 県の水産業について知る。	○ 天草町の定置網漁の映像や漁業規制の資料を提示し、魚の安定供給や資源確保についてつかませる。	3
2 アジの一本釣りをする漁師の思いや工夫を考える。	○ アジの一本釣りや商品ラベルを提示し、アジを差別化する漁師の姿に問題意識をもたせる。 <b>今まで一度にたくさんの種類の魚を獲っていたのに、なぜ魚をブランド化して売り始めたのだろうか。</b>	2
3 予想をたて調査をする。	○ 漁業体験や教室掲示資料をもとに、子どもの目的に応じた調査活動ができるようにする。	3
4 学習課題に対する考えを交流する。	○ 魚価安、漁獲量低下等の課題克服のために魚のブランド化に取り組み、魚価の底上げや地域活性化等を願う漁師の工夫について考えさせる。	2
5 全国の魚のブランド化について考える。	○ 地域ブランド事例に関する資料を持ち寄せ、魚のブランド化は、資源状況や目的に見合ったやり方で展開することが大切であることに気付かせる。	2
6 学習のまとめをする。	○ 地域漁業の活性化や消費者ニーズに応じた工夫をまとめたブランドラベルを作成し町に提案する。	1

●資料1／単元構成(13時間取り扱い)

潮の流れの速い天草灘から水揚げされるあまくさあじは、瀬つきアジとして高値で取引され、漁業者の所得向上と地域の活性化を目指し、県内の市場へ出荷されている。また、天草町では、一本釣りのほかに定置網漁を行っており、ブリ、サワラ、アジなどの高級魚や伊勢えび等が漁業収入を支えている。

そこで、この二つの異なる漁獲法の映像(写真A・B)を見せ、網漁をする漁師が、一本釣りをする事実をつかませ問題意識を高めさせた。

子どもたちは、網漁をしている漁師が一本釣りで獲ることに対し、「網の方がたくさん獲れるはず」「なぜ一本釣りで魚を獲っているのか」という問題意識を強くもった。このことをきっかけに自分なりの予想を立てていく中、魚を差別化して売っている漁師の姿に目を向けていった。子どもたちは、「ほかにも高級な魚がたくさん獲れるのに、なぜ1種類だけがブランド化されるのか」「同じ場所で獲れた魚なのに、なぜ、あまくさあじだけが扱い方が違うのか」という問題意識を高め、さらに追究へ向けて意欲を高めていった。

そこで、このような子どもの問いを取り上げ、次のような学習課題を設定した。

今まで一度にたくさんの種類の魚を獲っていたのに、なぜ魚をブランド化して売り始めたのだろうか。

この学習課題の解決に向けて、子どもたちは調査をしたり、調査したことをもとに考えをまと



●写真A／定置網漁



●写真B／あまくさあじの一本釣り

め伝え合ったりしながら、魚のブランド化が広がる漁業の背景や水産物のブランド化の効果について追究していった。

## 2 子ども相互の交流を促す学習活動の工夫 〔視点2〕

### (1) 調べ活動における体験や資料提示の工夫

#### ① すごいぞ、大漁だ!～定置網漁の体験～

視点1で述べた学習課題「今まで一度にたくさんの種類の魚を獲っていたのに、なぜ魚をブランド化して売り始めたのだろうか」の追究にあたり、最初の調査活動として、天草町大江漁港での体験・調査活動を位置づけた。

大江漁港では漁協の方々の協力を得て、定置網漁の体験をさせていただくことができた(写真C)。それまで子どもたちは、一度にたくさんの種類の魚を大量に獲ることができる定置網漁について学習をしているが、実際に漁をしている場面を見たことのある子どもは皆無である。子ども



●写真C／「すごいぞ、大漁だ!」

たちは、「すごい、大漁だ!」「1回で本当にたくさん魚が獲れるね」「魚の重みで網は破れることはないのかな」といった感想をもつ中、水産業への関心を高めていった。

② **なぜ、てまひまをかけて売なのか～ブランド魚の商品化工程の見学～**

漁港では、学習課題の追究に向け、あまくさあじの商品化工程の見学及び漁師への聞き取りを行った。

生きたまま水揚げされたあまくさあじを1匹ずつ針を刺し一瞬で仮死状態にしていく作業を目の当たりにした子どもたちは、「すごく速いよ」「あつというまの作業で魚は傷まないよね」「職

人技だね」と驚いていた(写真D)。魚の箱づめでは、氷や冷やしたエアークッション、シートを重ね、丁寧に魚を並べていく作業に、「魚を素手で触らないんだね」「鮮度を保つ工夫がすごいよ」「漁師さんの名前が入ったラベルを入れているよ」等、定置網で獲った魚の扱い方の違いに関心をよせていた(写真E・F)。



●写真D / 「1匹ずつ血抜きをするんだね」



●写真E / 「丁寧に並べるんだね」



●写真F / 「名前入りのラベルだ」

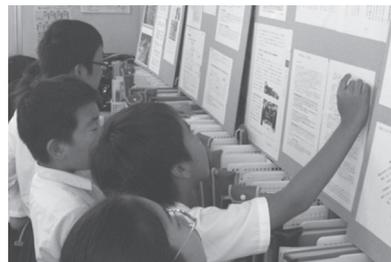


●写真G

見学の後、定置網漁とあまくさあじの一本釣りと、二つの漁をされている漁師の方からお話をうかがった(写真G)。子どもたちは、「なぜあまくさあじだけを一本釣りで獲っているのですか」「この魚にこれだけのてまひまをかけて売るのはなぜですか」と、魚のブランド化のよさや現在の漁業の課題について、事前に用意してきた質問を熱心につけていた。



●写真H / 「魚にストレスを与えると品質が落ちるんだ」



●写真I / 「一本釣りは資源の確保にもなるんだね」

# あまくさあじの箱詰めについて ～漁師さんのお話～



船から生きたあじを、網ですくい、氷の入った容器にすばやくうつします。あじは、氷で冷やすのは、仮死状態（動けないようにする）にしてあげられないようにするためです。暴れたら、魚に傷がついたり、ストレスを与えてしまうので、品質が落ちるのです。

仮死状態にしたあじに一匹一匹丁寧に針をさしていきます。針はえらのすきまからさします。これは、魚の外側に傷がつかないようにするためです。それと、血を抜くためです。血を抜くと身が白くなり、鮮度がおちません。この作業で魚は暴れることなく一瞬に死んでしまうので、ストレスもたまることなく品質も落ちません。

発泡スチロールの中に氷を入れ、平らにならした後、エアークッションをしきみます。これは、温度を一定にするためと、箱の中で動かないようにするためです。その後、緑の紙をしきみます。これは、魚がきれいに見えるようにするためです。

## ●資料3 / 教師自作の提示資料

### ③ なぜ魚をブランド化して売るのがか～教室での調査活動～

本実践で取り上げる天草町は、県内であっても学校から遠方にあるため、何度も現地調査に行くことは難しい。また、新しい形の地域の水産業であり、入手できる資料も限られている。

そのため資料の提示方法や調査のさせ方が重要になる。教室壁面を資料コーナーにし、生産者の話し言葉でまとめたカードや教師が取材し

た時の写真等を提示して（資料3）、効果的に室内で調査活動が進められるように工夫した（写真H・1）。

(2) 自分の考えをまとめたシートの活用  
学習課題に対する自分の考えやその根拠について、それぞれが明確に伝えることができるよう、図や言葉を使ってまとめられるシートを用意した（資料4）。

たかおは、魚をブランド化する理由について、「品質のよさをPRにより高い利益が得られる」という考えを、水産白書（教師の提示資料）やインターネット新聞をもとに、キーワードを図式化してまとめていた。こうしたシートをもとにして、

水産業のさかんな地域をたずねて ～水産物のブランド化～ №.5  
名前 ( )

今までたくさんの種類の魚を獲っていたのに、なぜ魚をブランド化して売り始めたのだろうか。

自分の考えを言葉や図を使って表現しよう

```

    graph TD
      A[魚の量が減る] --> B[輸入量が増える]
      B --> C[消費者は安い輸入の魚を買う]
      C --> D[漁業の人が困る]
      D --> E[利益になる 漁業をしたい]
      E --> F[国産の魚をブランド化する]
      B --> B1[輸入した魚の方が日本の魚より安い。]
      D --> D1[とった国産の魚が売れない。]
      E --> E1[新しい工夫が必要だ。]
      F --> F1[品質のよさをPR 国産魚の信頼を高めよう。]
    
```

国産の新鮮な魚とブランド化することで、輸入産よりも品質の高さをPRでき、高い利益を得られる。

考えのよりどころになった資料（資料名や参考とした説明文など）

- ・西日本新聞(2006年 8月10日)インターネット上)
- ・H19 水産白書 P.53



●写真J / 「その点について、僕はこう考えたんだけど、みんなはどう？」

## ●資料4 / たかおの根拠と考えを示したシート

教師は調査活動を通し一人一人がどのような根拠から、どのような解釈をしたのかを見取ることができた。話し合いでは全体の考えを深める上で効果的に考えを取り上げることができた。

また、グループでそれぞれに自分のシートを持たせて考えを説明し合わせることで、互いにシートを見合いながら、考えの共通点や相違点を述べ合ったり質問をしたりすることができた(写真J)。

資料5は、学習課題について、調べたことを基にグループで話し合った時の様子である。しょうの「ブランド化することで、消費者が高級でも安全で品質がいい魚のよさに気付く」という考えと、たつやの「安い魚が売れているのだから、消費者の多くは高いブランド魚は買わない」という考えの相違が話題になっていた。ブランド後の魚価の上昇(グラフ)と利益の増加(取材記録)を関連付けることで、「ブランドの魚のよさを理解し、購入する消費者が出てきて、その結果、漁師の利益アップにつながった」という

しょう：消費者は安いものを求めている。そこでブランド化することで、消費者は、高級でも安全で品質がいい魚のよさに気付く、結果的に国産の魚の信頼を得るんだと思う。だから国産の魚を買うようになる。(海外産と国産の消費量の内訳を示したグラフを示しながら)

たつや：でも、安いものを求めているのなら、値段の高いブランドの魚は買わないんじゃないかな。(ブランド化後の魚価の推移を示したグラフを示しながら)

しょう：そのことだけど、あじを「あまくさあじ」というブランドとして販売するようになって、利益が伸びたって、漁師さんが言ってたよ。だから、ブランドの魚を買う人が出てきたんだと思うよ。(シートに記録した漁師の言葉を示しながら)

さやか：それは、値段の高いブランドの魚が売れたのであって、国産の魚全体が売れるようになったのではないんじゃない。

ゆうこ：私もそう思う。でも、魚のブランド化で利益が上がったのは確かだから、漁師さんにとってプラスだね。

●資料5/しょうのグループの話し合いの様子

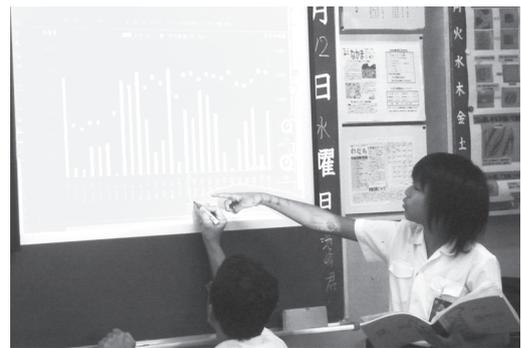
説明ができるようになっていった。

このようにして、シートの考えや資料を媒介にして話し合うことを通し、ブランド化によって漁業の収益が上がったことについてとらえていった。

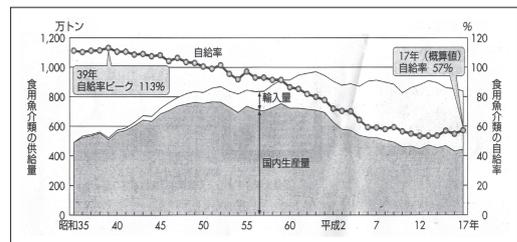
### (3) 個や集団の思考を深めるための教師のかかり

グループの話し合いでは、多くの子どもが、「ブランド化すると品質を認めた消費者がその魚を買うようになり、利益が上がる」という考えを説明していた。その中で、「ブランド化すると価格の上下が減り、漁師の収入が安定してくる」ことを主張していたゆうたの考えを取り上げた(写真K)。多くの子が主張する「利益の増加」とゆうたの主張する「収入の安定」は、根拠としているグラフが同じでありながら解釈が異なるためである。そこで、そのグラフをスクリーンに映した。

周りの子どもたちは、「価格が一定になったのは、市場で変わらない品質のよさが認められたからだと思う」という仲買人の立場からの考えや、「獲れる量は少ないけど、漁師さんの努力で確実に出荷されているからだ」と漁師の立場か



●写真K/「ブランド化後は、魚価が安定しています」



●資料6/提示資料「食糧需給表」農林水産省

今までたくさんの種類の魚を獲っていたのに、なぜ魚をブランド化して売り始めたのだろうか。 ～考えたことを図で表そう～

1. これまでの学習で明らかになったこと。  
ほくは、最終に、「本当にブランド化された魚は高級なものか」というきもんがありそこからこの学習をしてきました。ほくは、ブランド化で価格が安定したという事実で、収入アップし、魚師のやりがいが高まったから、ブランド化をしたのだと思いました。また、ブランド化した魚がおいしい魚となりブランド化していない魚の収入も上げるためにブランド化したのだとも思います。

●資料7 / 話し合い後のさとの考え

今までたくさんの種類の魚を獲っていたのに、なぜ魚をブランド化して売り始めたのだろうか。 ～考えたことを図で表そう～

1. あまくさあじの勉強をする前は、「ブランド?」みたいな感じでよくわからなかったけど、話し合いをしていくうちに、「ブランド名がなまる」という事かてきた。初時は後継者も収入が増えるかと思っていたけど、話し合いをするにつれて、地域も有名になるというふう思った。そういうふう、ブランド化していいとをみだし、天幕も味もしてもらえるからと思つた。それから、後継者も消費者もかえると思う。

●資料8 / 話し合い後のゆりの考え

今までたくさんの種類の魚を獲っていたのに、なぜ魚をブランド化して売り始めたのだろうか。 ～考えたことを図で表そう～

1. 一本釣りでも釣れた魚の量が少ないのは最初は、分からなかったけど、魚師さんが若い人のために、魚を取るときは、おまけに「おいしい」とか「分かった。でも、若い人は、これから増えていくと思う。もっと増やすためには、ホー4ペー、ジゴロミ、セム7んもして、系統は、もっとやりたいと思う若い人が現れるという意見が出ていたので、私はさんせい。

●資料9 / 話し合い後のけいこの考え

らの考えが出された。さらには、消費者の立場から、「価格の安定は、消費者にとっても品質の面で信頼感を与える」という考えを述べる子どももいた。教師が、「ブランド化のよさは何か」を問うと、「漁師さんの収入の増加になっている」「消費者のニーズにこたえるものである」「地域の特産物が有名になる」という考えを述べる子どもが続き、全体でブランド化のプラスの効果について共有することができた。

話し合いの後半では、資料6のグラフを提示し、「この資料とブランド化との関係について説明できないだろうか」と発問した。子どもたちは、意見を述べ合う中、日本の魚が売れない事実、漁獲量の減少などの課題に気づき、その打開策として魚のブランド化に取り組み始めたことを自分なりに解釈していった。

さとはは、シートに「ブランド化した魚による収入アップだけでなく、ブランド以外の魚の品質も認められ売れるようにするため」と書いて

いた(資料7)。

一方、ゆりは、「地域名をブランド名にすることで、産地が有名になり後継者も増える」という、後継者の課題についても考えていた(資料8)。

また、けいこは、「将来のために魚を獲りすぎないようにしていること、若い漁師を増やすためには、もっとあまくさあじの宣伝が必要だ」という持続的な漁業の在り方について述べていた(資料9)。

このようにして、魚のブランド化の意味を、漁獲量、収益、地域活性化、後継者、資源確保等様々な面からとらえさせることができた。

## V おわりに

### 1 問題意識を高める教材の開発〔視点1〕

水産物のブランド化という新しい形の漁業の事例を教材化した。同じ漁師が定置網漁と一本釣りとは異なる方法で漁業を営んでいる事実に着目し、「今まで一度にたくさんの種類の魚を獲つ



●資料10／子どもが作成した「あまくさあじ」ラベル

ていたのに、なぜ魚をブランド化して売り始めたのだろうか」という学習課題を設定した。学習課題の追究を通し、定置網漁の映像資料や漁業体験をもとに、「定置網漁の方がはるかに獲れる量も種類も多いはずなのに、なぜわざわざ1匹ずつ釣り上げているのだろうか」「安い外国の魚が売れているのに、なぜブランド化して値段の高い魚を売るのか」「魚をブランド化することで、どんな効果が生まれるのだろうか」といった、問いをもたせていくことができた。

追究の前半は、体験したことや漁業従事者への取材等をよりどころにして、あまくさあじの商品化に尽力する人々の思いや願いについて迫っていった。後半では、調査活動が進んでいくと全国の漁業に関する資料の収集・検討にも発展し、話し合いの場面では、魚価安や後継者不足など日本の漁業の抱える課題をつかんでいった。

そのようにして、「定置網漁だけでも魚をたくさん効率的に獲ることができるはずなのに」「なぜ魚のブランド化が必要なのか」「全国においてはどうか」と子どもたちの問題意識が高まり、本教材とのかかわりを深めていくことができた。

単元終末のあまくさあじのラベル作成の活動では、これまでに追究してきた成果を、自分なりの表現方法で意欲的に作品に表していた(資料10)。各作品は、あまくさあじのPR活動につながることから天草町漁協に掲示され、学習の成就感や満足感をもたせることにもつながった。

## 2 子ども相互の交流を促す学習活動の工夫 〔視点2〕

子どもたちが、他者との交流において新たな考えや事実と出会い、自分の考えや集団としての考えを深めていくことができるように、多様な学習活動を組み合わせて位置付けた。集団の考えを深めるためには、学習課題に対して一人一人が自分の考えをしっかりともたせることが大切である。そこで、漁業体験、教室での資料を通した調査等、調査活動の充実を図った。また、それぞれに必要な情報を整理させ、シートに自分の考えを図や矢印、言葉等を使ってまとめていく活動を重視した。

その結果、それぞれが、自分なりの予想や見通しをもって学習課題を追究していくことができた。グループでの話し合いでは、各自のシートを持たせ、それを基にして互いの意見や質問を交流させたことで、話し合いの活性化につながった。また、シートの記述からは、教師が子どもたちの考えやこだわりを把握することができた。そのため、全体の話し合いで、どんな生徒の考えやその根拠となる資料を取り上げるのか、また、どんな相違点に着目させて話し合いを進めるのか等、教師の手だてに生かすことができた。

このようにして、漁師や消費者、あるいは地域の一人といった立場から、日本の漁業における様々な問題、それらを克服していくための人々の努力や工夫、今後の漁業への明るい展望等について考えさせていくことができた。

## 3 今後の実践に向けて

この教育実践に当たって、次のことが課題として挙げられる。

- ・追究意欲の高まる教材のさらなる開発
- ・一人一人の子どもの考えの変容を見取るための工夫と変容を促す教師の支援
- ・話し合いにおける集団思考を深めていくための教師の手だて

今後は、これらの課題解決に向けて研究を深めていきたい。